

インドネシア「津波被害者の子どもを対象にした教育支援と精神ケア」（3年度）



2008年8月現在のヌサ村。被災者はすでに村内の避難所には住んでおらず、残りの住宅再建設（上）の作業員が建設期間中に避難所を利用している



津波で塩水がかぶってしまい、使用できない田畑はいまだ多い。住民は、村内にできたパン工場（上左）や他の国際 NGO によりトレーニングを受けた手工芸品製造（上右はコーヒー・パウダーのパッケージを再利用した帽子）など、少しずつ生計活動を始めている

NO	NAMA	KELOMPOK AWAL	TREATMENT AGENCY	REMARKS
1	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN
2	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN
3	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN
4	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN
5	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN
6	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN
7	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN
8	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN
9	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN
10	ALYAN	ALYAN	ALYAN	ALYAN

3年次の対象 95人のなかから、特別な観察が必要と判断した 14人の子どもを特定した。精神科医から訓練を受けている村の住民ボランティア（下写真）が各自 1~2名を担当し、個人カウンセリングや脳のバランス・トレーニング、マッサージなどのケアを定期的に行い、記録（上写真）をつけている



精神科医による特別ケアのようす



毎週ボランティアが行っている創造性開発活動のようす。「Santri exercise (イスラム教寄宿舎学校のエクササイズ)」「Brain Gym (左右脳のバランス・トレーニング)」「歌」「学習コース」「読書」「読み聞かせ」、新聞古紙をつかった貼り絵、ベルづくり、再生紙づくり、折り紙、塗り絵、10代の子どものための電子ベルなど)」など



ヌサ村の子どもたちと行ったレクリエーションのようす(2008年7月)。パン食い競争、二人三脚、砂の城づくりコンテストなどを楽しみ、子どもたちは心を開放して楽しみ、団結力を高めた

近隣の小・中学校教師へのトレーニング。問題が認められる生徒の症状や接し方などを精神科医のルヒル女史が解説している